

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第112号

令和2年7月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正平2年、前哨戦・圧倒的勝利で軍事力を誇示し 尊氏との和睦による吉野朝復権を目指した正行

＝ 正行に籠城戦なく、京を目指す正面作戦 ＝

● 北畠親房の主戦論に始まる第2期戦乱 ●

今回は、正行第2期戦乱時代となる正平2年のうち続く戦いとその経過を辿り、正行の軍略・戦法を検証する。

第2期戦乱時代の序章は、興国4年(1343)、高師冬が南軍を制圧し、東国を勢力下におくと、北畠親房は関城が陥落し、この年末、吉野に入り主戦論の急先鋒となることに端を発する。

足利尊氏は、興国5年(1344)、後醍醐天皇追善のために天竜寺を落慶し、翌年8月、天竜寺で後醍醐天皇の供養式典を執り行い、胸につかえていた後醍醐天皇への思いに一区切りをつけると、いよいよ、懸案の楠討伐・吉野追放に向けた動きに加速をかける。

正平2年(1347)、熊野水軍を中心に海賊が宮軍に合流し懐良親王が薩摩で九州上陸作戦を開始すると、尊氏はこの時が楠討伐の時期と動き出す。

一方、正行は、この間十分に軍備・戦力を整え、戦いに勝利することで武力を誇示し、吉野朝復権に向けた尊氏との和睦の道を探ろうと戦略を立てていた。

正平2年、双方にとって、待ったなしの雌雄を決する戦いが始まることに。

父、正成は20以上の要塞群に囲まれた千早城という天下屈指・難攻不落の山城にこもり、籠城戦を得意とした。またその戦法は、東国武士をあっと驚かせる奇策で敵を翻弄した。

子、正行の快進撃はどのような戦いであったのか。

● 隅田の戦い、凋落による無血開城 ●

正平2年、正行第2期戦乱時代は、8月9日、足利直義の発する南進令・楠討伐令で始まる。

この時正行は、かねてから凋落活動を行ってきた須田一族の動きを制する戦いから始める。父、正成もそうであったように、後顧の憂いを断つため、河内と吉野の連絡路を確保する隅田城攻略を、翌8月10日、電光石火の如く隠密裏に出陣し、500騎で隅田城を取り囲み、隅田25人衆の合議で政を行う弱みに付け込み、開城を迫った。

隅田城に城主はいず、25人衆は幕府方、吉野方に分かれ、一枚岩ではなかった。

正行、最初の戦いは、戦わずしてかつ、凋落による無血開城であった。

● 池尻・八尾の戦い、正面作戦 ●

直義の南進令の命を受けた細川顕氏は、河内守護代秋山四郎次郎に命じ、河内東条の前線基地の一つと言える池尻城抑えにかかる

池尻城は、八尾城、丹下城と並び、河内と和泉をつなぐ東高野街道の要衝であった。

8月24日、時を置かず池尻に出陣した正行軍350騎は、秋山四郎次郎200騎を一気にたたき、一兵も失うことなく城を落とし、秋山は天王寺に敗走した。

池尻城を落とされた細川顕氏は、再び兵を集め、秋山四郎次郎を八尾城に向かわせる。

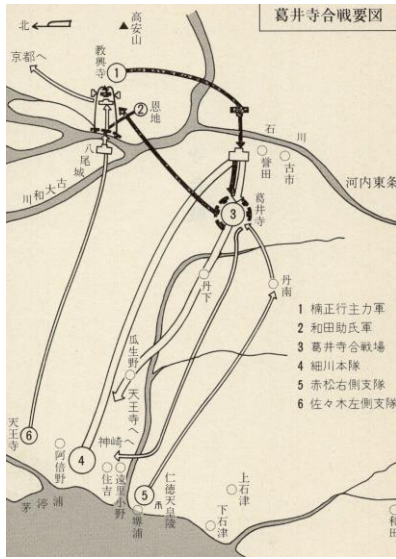
幕府にとって、天王子・堺浦の前衛として八尾城、丹下城の確保は至上命題であった。

9月9日、早朝に始まった八尾城の戦いは、正午を迎えるころには決着がつき、八尾城は正行の手に落ちた。

この後打ち続く前哨戦となる池尻、八尾での戦いは正行の描く戦略通りの結果となる。すなわち、打ち続く前哨戦での敗北が、幕府方の楠打倒に火をつけ、さらに大軍が送り込まれることになるのである。

一方、武力を誇示し、圧倒的勝利で和睦に持ち込もうとする正行の術中は見事に功を奏し、正行の描く一大決戦へと進むこととなる。

● 藤井寺の戦い、夜襲作戦 ●



池尻の戦い、八尾の戦いと、前哨戦での細川勢の敗北は、足利直義の幕府内での地位の低下となり、結果、幕府内で高師直の勢が増すこととなった。直義は、このような状況を放置できず、細川頼氏に命じ、河内東条に再び派兵を命じ、藤井寺での戦いを迎える。

細川頼氏 1700 騎を主力とする 2900 騎の幕府軍は、9 月 16 日夕刻、八尾から藤井寺に入った。

誉田八幡宮の背後の山陰に本隊 650 騎を配した正行軍は、和泉に 100 騎の陽動部隊、八尾・教興寺に 50 騎の搦め手を送った。

この時正行がとった作戦は、夜襲作戦という奇襲戦であった。教興寺では苦戦を強いられた正行軍であったが、山陰に放った夥しい松明の明かりを背に、敵兵の寝込みを襲った夜襲に、細川軍は大軍襲来と慌てふためき統率を欠いた烏合の衆と化し、たちまちにして総崩れとなった。

細川頼氏は天王寺へ、赤松隊は摂津へ、それぞれ逃げ帰った。そして、この戦いで佐々木氏康を討ち取った。

● 住吉天王寺の戦い、放火作戦 ●

直義は、背水の陣を敷き、細川頼氏 4000 騎に、山名時氏 3000 騎、そして佐々木、赤松ら 2000 騎、総勢 9000 騎という大軍を再び送り出してきた。

この時、正行軍は、本体 500 騎、大塚惟正隊 300 騎、安間了願隊 300 騎、和田賢秀隊 300 騎、和田行忠隊 300 騎、総勢 1700 騎で立ち向かう。

この時の正行の作戦は、放火作戦である。

住吉に構える山名、そして天王寺に構える細川、これら両軍に対し、瓜生野に火を放ち、火勢を背景に瓜生野から住吉、天王寺へと串刺しのように、一気に押し出す作戦である。

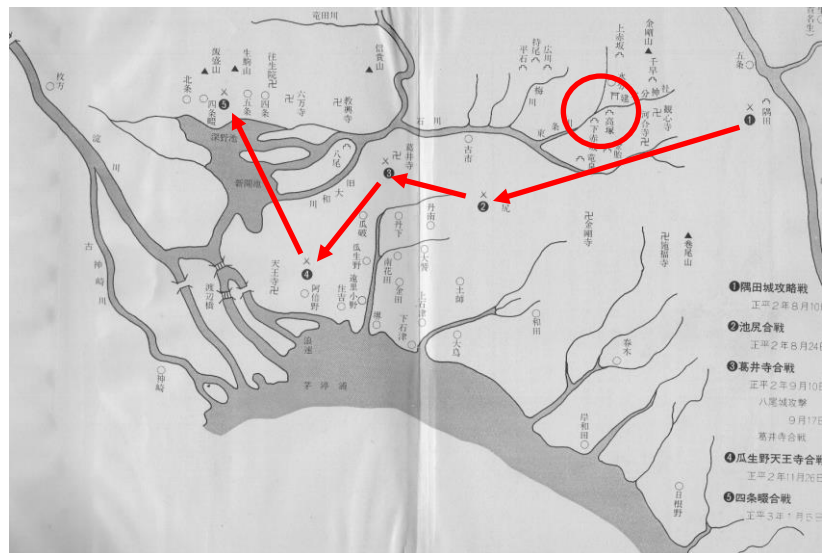
この時、正行が最も苦心したのが住吉・天王寺の神仏

に弓矢を引くことを避けることであった。放火作戦による大軍襲来を予測させ、戦意を奪う作戦である。

作戦は的中する形で、前線の赤松軍の退却に始まり、山名軍も瓜生野で敗れ潰走した。天王寺に陣していた細川軍はこれら潰走する 2 軍に急き立てられるように退却したのである。

この時、細川頼氏は船で敗走するが、多くの兵は京の都を目指して大川にかかる渡辺橋に殺到し、大川に落ち、溺れる兵が続出する。また、山名時氏は負傷し、弟の兼義は討ち死にする。

「戦いをやめ。溺れる兵を助けよ。」と、正行が瀕兵を



助けた渡辺橋の美談は、正行の博愛精神を物語る逸話として、今も語り継がれている。

● 正行の強い軍事力が、逆の道へ ●

正行は、住吉・天王寺の圧倒的勝利で、幕府との停戦・和睦の好機到来と思い描くも、北畠親房が主導する吉野朝は動かず、逆に打ち続く戦勝を尊氏を倒す好機到来とばかり、京の都を目指そうとする。

正行は、和睦の道は遠のき、雌雄を決する戦いが不可避と、覚悟を決めることになる。

そして、尊氏の動きは素早く、師直・師泰を大将とする大軍を差し向けると、正行は、吉野を訪れる。

先に寄せてきた大軍に、正行の正面突破・逆寄せの戦い“四條畷の戦い”が待っていた。(掲載の図/田中俊資著「楠正行」より転載:赤丸・矢印扇谷挿入～正行が京の都に向かって進んだことが分かる) (文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)